

東アジア学生ワークショップ参加報告書

京都大学文学研究科修士1年 吉田絵弥

東アジアジュニアワークショップは、私にとって初めての、社会学を専攻する他大学の学生との交流の場であり、初めての国際的な研究発表の場であった。そこで私は多くのことを学んだ。

今回の参加で、全体を通して強く感じたのが、英語の運用能力の差である。韓国や台湾では英語教育が日本よりも行われているということは知っていたが、日常的なコミュニケーションと研究発表双方で、ソウル大学・台湾大学の学生と私の英語の力の差を実感した。社会学という分野で研究をしていく上で、英語は必要不可欠である。論文の多くは英語で書かれているし、日本以外の国の人と話すときは、英語を使わなければならない。今回、言いたいことをうまく伝えることができない、相手が何を言っているかがわからないということがしばしばあった。より高い英語運用能力を身につける必要性を強く感じた。

ワークショップの初めの3日間はフィールド・トリップであった。Daerim等移民が多く住む地区を訪れて移民の方々の話を聞き、また戦争記念館や歴史博物館に行つて韓国の歴史を学んだ。移民の多く住む地区に行き話を聞くというのは、普段の旅行などでは難しいことであり、よい経験になった。また、ソウル大学の学生の方々が地区、歴史、文化等について解説をしてくれて、深く韓国について学ぶことができた。韓国と日本は、現在外交面で大きな問題を抱えている。我々若い者がこの問題を真剣に考えていく必要があるが、そのために、両国相互の理解は不可欠だ。今回のフィールド・トリップは、私ならびに日本の学生の韓国の理解に大きく寄与したと思う。また、韓国に行き、韓国（また、台湾）の学生と歴史や社会について話すことは、相互のより深い理解につながったと思う。

ワークショップの後の2日間は学生の研究発表が行われ、私自身研究発表の経験を積み成長するとともに、他の国の社会学の研究に触れるよい機会になった。私はハーバーマスの公共圏概念を用いたインターネット空間の分析、という内容の発表を行ったが、この発表は社会学的ではなく（私は学部生の頃、哲学を専攻していた）、社会学で研究をしていく上で自分が大きな課題を抱えていることを実感した。この課題については後で述べる。今回のワークショップでは、また、他国の社会学専攻の学生がどのような事柄に関心を持っていて、どのような調査を行っている傾向があるのかも知ることができたのも有益であった。例えば、日常生活で我々が感じる事柄から出発して、統計処理や聞き取り調査によって研究を行うという形式をとる学生の割合が、日本の学生よりも高いように感じた。社会学は社会を研究する学問であり、我々は現実社会や日常生活との関係をつねに意識していなければならない。他の学生の発表を聞いて、私は自分が現実社会から離れたところで物事を考えがちだということを改めて感じた。発表の後、台湾大学の先生が私に、「あなたは本を読むのをやめて、もっと広い視野をもって現実社会に目を向け、実際にあなた自身でさまざまなことを経験するべきだ」というアドバイスをくださった。これは、大学院で社会学専修に入り、私が自分に必要だと感じ続けていて、また今回のワークショップで改めて強く考えたことと重なる。日本に帰ってからの勉強・研究の方針を決めるのに非常に大きなものを得たと思う。